

きみのからっぽのベッド

眠らない東京をめぐる8つの物語

Another party
Dangerous game
After dinner
Midnight accident
Meet again
First kiss
In my room
Empty bed

板橋雅弘

Itabashi Masahiro





板橋雅弘(いたばし・まさひろ)

1959年東京生れ。中央大学法学部卒。著書に「夢のいる場所」(集英社)。「ジルコニアのきらめき」(PHP研究所)。「きみのいないナビゲートシート」(シンコー・ミュージック)など。

きみのからっぽのベッド

—— 眠らない東京をめぐる8つの物語 ——

1991年11月14日 初版発行

著 者 板橋雅弘

発行人 草野昌一

発行所 株式会社シンコー・ミュージック

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1

〒101 東京都千代田区神田小川町2-1

振替口座 東京4-98233

電話 03(3292)2861〔大代表〕

03(3292)2396〔編集部〕

03(3295)4191〔営業部〕

印 刷 図書印刷株式会社

©1991 by Itabashi Masahiro

©1991 by Shinko Music Pub. Co., Ltd.

定価900円(税込)

ISBN4-401-61342-2

Printed in Japan.

●本書の本文及びイラスト等の無断転載は固くお断りします。

●乱丁、落丁本はお取り替えます。

●本書についてのご感想を編集部宛までお寄せください。

きみのからっぽのベッド

眠らない東京をめぐる8つの物語 ---

Another party

Dangerous game

After dinner

Midnight accident

Meet again

First kiss

In my room

Empty bed

板橋雅弘

Itabashi Masahiro

CONTENTS

ウェディング・パーティー Part 4	5
悪いあなた	33
アフター・ディナー、ビフォア	65
暗闇にセミが鳴く	83

か.....171

ぞうじ、おやすみ.....147

初めての朝帰り.....127

P.S. 再会.....103

Illustration

Kusunoki Nobuo

Design

Takahashi Masayuki



ウェディング・パーティ Part 4



悪くない結婚式だった。

万滞りなくおこなわれたといつてもいい。なんの変哲もないかわりに、揃うべきものはすべて揃った式。

拍手に迎えられる新郎新婦の入場、仲人による褒めちぎりの紹介、主賓のこれまた褒めちぎりの挨拶といったベーシックな部分だけでなく、新郎の父親が世話になったとかいう人物によるスピーチ慣れしたおもに自分の自慢話もあったし、酔った田舎の親戚とかいうおじさんが各テーブルを酒を注いでまわつてもくれた。新婦の友人三人組は「てんとうむしのサンバ」を歌って口づけせよとはやしたててくれたし、新郎の友人は「きみといつまでも」を歌って途中の台詞をいわせた。

しあわせだなあ。

皮肉でもなんでもなく、そう思える結婚式だった。伊勢海老のテルミドールだって、そんなにまずくはなかった。引出物がしゃれた小皿だったのも、帰りにかさばらずにすんでうれしかった。もつとも、これには不満の人もいたかもしれない。めでたい席には塗物がでなくちゃいけない。年寄りには、そんな考えの人も多いらしい。とくに田舎の人は。新郎は地方出身といつていたから、引出物選びでは、ひと悶着あったのかもしれない。

ぼくはそんなに何度も結婚式によばれたことがあるわけではないけれど、すでに塗物の

お椀とジバンシーのティーカップは、それぞれ二セットずつ貰っていた。その場で引出物を開いたりはしなかったから、それが小皿だと知ったのはあとでのことだが、とにかくこぶりで軽いものはうれしかった。

両親への花束贈呈、それにつづく新郎の父親による挨拶で、式はつつがなく終わった。

「このあと、六本木のほうですぐ二次会をやりますので、みなさまご出席くださいますようお願いします」

司会の声をあとに、ぼくは席を立った。

やれやれ。悪くない結婚式でも、二時間半も座りっぱなしでいたら、疲れるのは仕方ない。思わずタキシードの蝶ネクタイをゆるめそうになったが、そんなことしてもなにもらくにならないことに気づいてやめた。

「どうした。ダメージを負ったって顔をしてるぞ」

同じテーブルにいた栗原が、ぼくの顔をのぞきこんで笑った。ニヤツと、それでいて、さらりとした笑い。湿気はとくに乾いてしまったよな。そういつてるみたいだった。

「ちょっぴりだけ、損した気分だ」

ぼくもさらりとニヤツとしてみせた。

「さて行きますか」

おやじ臭い栗原のひとことで、ぼくや同じテーブルにいた何人かが、新郎新婦に挨拶して去る招待客の列に着いた。ぼくたちはみな、大学のサークルでの仲間だった。卒業して、もう四年になる。なかには久し振りの顔もあった。二次会はパスして、この連中だけと飲むのもいいかもしれない。

「どうする。このあと」

ぼくの問いに、すぐさま栗原が応えた。

「二次会に決まってるだろう。出合いのチャンスだぞ」

その言葉はどこまで本気かわからなかった。確かに、結婚式の二次会で相手を見つけたって話は聞いたことがある。新郎の友人と新婦の友人が新たなカップルとなる。いかにも簡単に入手できそうな恋愛だ。

でも、待てよ。ぼくたちは新婦側の招待客ではないか。女性の半分は、同じサークルにいた子たちだ。いまさらチャンスもないだろう。

反論しようとしたときには、列が進み、挨拶の順番がまわってきていた。

「本日はおめでとうございました」

御両親にむかつて、頭を下げる。つづいて仲人さん。そして、新郎新婦。

そう、ぼくは新婦に招かれてやってきた。新婦の名前は美奈子。ぼくが大学時代に付き

合っていた子と同じ名前。当たり前だ。その本人なのだから。

「おめでとう」

あまり馴々しくならないように、ぼくは美奈子に声をかけた。

「ありがとう」

式の途中でお色直しに立った美奈子は、淡いピンクのドレスに身を包んでいた。

目と目が合った。

きれいだよと、ぼくは心のなかでつぶやいた。逃がした魚だからではなく、今日の美奈子はきれいだった。

新郎にも頭を下げ、さらにもう二回頭を下げて、ようやくぼくは列から解放された。少しだけ、胸が疼いた。秋の訪れの透明な空気を感じるような、淡い疼きだった。

新郎を自分に置き換えるような作業は、まったくする気分ではなかった。美奈子のこととは、昔のことだ。いまのぼくがふしあわせなわけでもない。ただ、胸が疼いたのだ。

ぼくたちはとりあえず、ロビーのソファに腰を下ろした。

「二次会の場所です。なるべく参加をお願いします」

新郎の友人らしい男が、ひとりひとりにコピー紙を手渡していった。

店はぼくも知っているちよつとしたバーだった。午後八時より。会費は男性七千円、女

性五千円。豪華賞品の当たるピング大会もあります。

腕時計を見ると、すでに七時をかなりまわっていた。夕方からの結婚式のいいところは、二次会までの暇を持て余す心配がないことだ。窓のない部屋にいたのでわからなかったが、十月吉日の陽はとつくに暮れてしまっている時刻になっていた。

都心にあるこのホテルの式場からは、タクシーを拾えば六本木まではたいして時間はかからない。ぼくたちはしばらく雑談を交わしてから、二次会の会場にむかうことにした。ぼくたちは、正確には五人だった。無理をすれば一台のタクシーに乗れないことはない。でも、そうする気にはなれなかった。だとしたら、三人と二人に分乗するしかない。

タクシー乗り場で順番を待っていると、見覚えのある顔が近づいてきた。

「二次会、行くんですよ。一緒に乗せてってよ」

声をかけてきたのは、淑子だった。その横には直美。ふたりともぼくや美奈子と同じサークルにいた仲間だ。来ているのは知っていたが、テーブルが違っていたし、話す機会がないままになっていた。

淑子は紺のドレス、直美は着物だった。

「べつに構わないよ」

そういつてしまつてから、ぼくは栗原のほうを見た。

「いいんじゃないか」

なんでもないように、栗原は応えた。

ああ、そうか。こういうシチュエーションになって、初めてぼくは栗原が二次会に行きたかった理由がわかった。

なにもぼくだけではない。サークルは多くの恋愛を生む。栗原は直美と付き合っていたのだった。卒業する頃には、すでに別れていたけれど。ぼくが美奈子とのことを完全に思い出にしまえていくからといって、栗原もそうだとは限らない。

ぼくよりずっと察しのいい他の連中は、男三人で先にタクシーに乗り込んでいった。

四人になったぼくたちのまえに、次のタクシーが滑り込んできた。

「まえに乗るよ」

ぼくが口をはさむよりまえに、栗原は助手席のドアを開いていた。戸惑ってちらりと淑子のほうに視線をやると、目が合ってしまった。淑子はじっとぼくを見ていた。そんな気がした。細かい気配りのできないヤツと、淑子に責められているんじゃないかと思ったが、それはぼくの考えすぎかもしれない。

仕方なく、ぼくはうしろの座席のいちばん奥に入った。つづいてドレスの淑子が座り、着物の直美はちょこんとお尻を乗せた。

栗原が行き先を告げると、うしろのドアがバタンと閉められた。

帯がぺしゃんこにならないように、直美は背筋を伸ばしている。直美の目のまえに栗原の頭があった。

「美奈子、きれいだったね」

淑子がぼくに語りかけた。あっちのふたりはそつとしておきなさいとでもいうように、ぼくのほうをしつかり見ていた。

「うん、きれいだった」

ぼくとしては正直にいったつもりだ。

「きれいだった、か」

淑子は肘をぼくの脇腹にこすりつけた。

「まだ美奈子のが好きだったにして」

「そんなことはないさ」

「そうかしら」

口許だけで笑って、ぼくはそれには応えずにおいた。強く否定するのもなんだし、ぼくには淑子の言葉がぼくに向いているのか、本当は栗原と直美に向いているのかわかりかねたからだ。

沈黙のまま、タクシーは走っていった。ぼくは運転手がラジオのスイッチをひねつてくれないかと待ったけれど、とうとう六本木に着くまで、単発的なぼくと淑子のやりとり以外は沈黙がつづいた。

悪くない二次会だった。

つまみはふんだんにあったし、席も腰を下ろしたいと思っている人間全員に行き渡る程度は用意されていた。貸し切りだから、他の客に気兼ねする必要もなかった。なんとなく浮き足だった空気が流れるなかで、だれもが意識的にはしゃいでいた。

それが結婚式の二次会というものだ。

ぼくは水割りのグラスを片手に、ソファのようになった席にどっかりと腰を落ち着けていた。隣には栗原、反対の隣には淑子。直美はむかいに置かれた背もたれのない椅子に座っている。この一角だけ、タクシーのなかの沈黙を引きずっていた。音のブラックホールのように、まわりの喧噪を吸い込んでいく空間。

「落ち込んでないで、なにかしゃべりなさいよ」

淑子がぼくを促した。

べつに落ち込んでなんかない。栗原と直美のペースに巻き込まれてしまったただけだ。

「あんまりかわいい子がいないな」

仕方なしに、ぼくは栗原にいった。

「ああ、期待したほどじゃないね」

気の抜けた返事が返ってきた。心ここにあらず。

「なによ、再会をじゃなくて、新しい出会いを期待して来てたの」

淑子が強い口調で、いきなり栗原と直美の本日のテーマに斬り込んできた。ぼくにはあまりいいアプローチには思えなかった。もっとデリケートなやり口があるだろう。ぼくはさつきから、それを探していたのだ。

栗原と直美の視線が、一瞬絡まって離れていくのが見えた。

「新しい出会いぐらい、求めたっていいだろ」

とりあえず、といった感じでぼくは口を開いた。

「なにいつてんのよ。まだ美奈子が好きなくせに」

「とっくの昔に終わったことさ」

「そう？」

「そうさ」

ぼくはちよつと淑子はむきになりすぎだと思った。